

……文香ちゃんは、そのことを知っているのかな。

知っていたとしても、知らなかったとしても、私は自分から文香ちゃんに聞いてみる勇氣はなかった。

公園に着いたのは、約束した時間より十五分も前だった。文香ちゃんを待つためにベンチに座る。

公園の中にはブランコやすべり台、シーソーといった遊具があるけれど、十二歳の私は、もうそれらのものには心をうばわれなくなっていた。それに、ひとりですべり台をすべっているところなんてクラスメートに目撃されたりしたら恥ずかしい。だから、私はベンチに座る。

「だーれだ」

ふいに後ろから目をふさがれた。

文香ちゃんの声ではないことはわかったけど、だとしたら、だれ？

「ねえ、ねえ、だーれだ」

私の目をふさいでいる謎の人物がふたたび問いかけてくる。でも、本当に誰だかわからないんだもんな。

「えーと、相崎さん」

しかたないので、私は自分のクラスである六年三組の出席番号一番のひとの名前を言った。

「ブー、ちがいます」

声が返ってくる。

うん、そうだよ。相崎さんの声とは全然ちがうもの。

「誰なのか、わかりません」

ここは正直に答えようと思って、私はそう言った。

「なんだ、つまんないの。じゃあ、あたしがいいって言うまで目をつむってて、ぜったいだよ」

言われたとおりに目をとじていると、ベンチの周りをタタタ……と走る音が聞こえた。足音がびたつと止まると、

「目を開けていいよ」

なぞの人物が言ったので、目を開ける。

「あー、きみ」

目の前にいたのは、この前もここで会った、あのへんな女の子だった。

そういえば、私、この子を怒らせたままだったんだ。小さな子扱いしちゃったけど、私と同じ十二歳なんだよね。

今日は、それをちゃんと心にとめておこうと思った。

「ユナちゃん」

その時、公園の入り口から文香ちゃんがこっちへ向かって走ってくるのが見えた。

「ごめん。ちよつと遅れた。マンションのエレベーターがなかなかこなくて。階段のほうが早かったかも」

文香ちゃんは肩でハアハアと息をしながら言った。

「大丈夫。私も今来たところで……」

「ひっどーい！」